Rappelz～あくなき冒険者たち～

なんたく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｒａｐｐｅｌｚ～あくなき冒険者たち～

【Ｎコード】
Ｎ３２７６Ｃ

【作者名】
なんたく

【あらすじ】
父親のような冒険家を目指す心優しい少年ディンは、未来の冒険家を生み出す修練者の島へ身を乗り出し、困難な旅に出かける。旅の途中で様々な人と出会い、モンスターを倒し、ディンは何を思い、何を得るのだろうか。無料オンラインゲームＲａｐｐｅｌｚの舞台にした小説です。至らない点がありますが、ゲームの雰囲気を崩さぬよう努力致しますので何とぞ宜しくお願いします。

クエスト1：出発

誰にも阻害されることのない天空に浮かぶ町、ラクシ。中央に建てられた3つ頭の塔を中心に、大理石で出来た建物が立ち並ぶ。大神アストラルの下、住人はそこで商業を営み、訪れる冒険者を歓迎する。まだ薄暗いちょうど夜明けに入ろうとする時だった。まだ目を覚ます人々が少ない中、一人の少年が世界を見つめるための旅に出ようとしている。

「女神様。ボクはこれから修練者の島で修行して、父さんみたいな立派な冒険家になるために旅をします。女神様にはいつも感謝でいっぱいです。しばらくアナタのところでお祈りが出来なくなるけど、どうかご慈悲をお与えください。」

パン、パンっと少年は幸福の女神の石像の前で両手を合わせ、お祈りをした。

少年は顔を上げると、鉄塔の下で自分を待つ男女二人のところへ駆けていった。

「ディン。本当に、行くのね。」

「うん……。」

天空の更に上を突き刺す白い鉄塔の下、金髪のデーヴァ族の少年ディンは頷いた。

その母親にあたる同じく金髪のデーヴァ族の女は不安そうな眼差しでディンを見る。

「そう、なら…。修練者の島から戻ってきたら絶対にすぐその顔を出すのよ。母さんはすごく心配にしてるんだから。アナタの父さんみたいなことになったらもう…。」

「大丈夫だよ、母さん。ボク、ちゃんと帰ってくるから。」

母親が涙を必死でこらえるのを見てディンはそっとなだめ、安心させようとした。その後ろで、鉄塔が青白い光を放っては消え、また

その光を放った。これは、ディンの出発の合図。
「そろそろ、行くかい？」
鉄塔を管理している青い髪の男が尋ねる。ディンは無言で頷いた。
「では、もっとテレポート塔に近づいて。」
白い鉄塔…、人々を違う世界に送りだすテレポート塔の中心部に、ディンはゆっくりと入っていった。そして最後にじっと母親の姿を見つめる。
「あっちへ着いたら、我らデーヴァ族の案内人ユシスに伝えるんだよ。」
「はい。」
ディンがそう応えるのを聞くと、青い髪の男は魔法の言葉を紡ぎ始めた。
「では、行くぞ。」
男が仕上げに掛かると、ディンは緊張で顔をこわばらせる。そして男はテレポートの魔法を発動させた。
「テレポート！アストライオス神殿！！！」
すると鉄塔の光の中にいたディンの姿が急にゆがみ、そのまま消えてしまった。恐らく、指定先の場所へテレポートしていったのだろう。今この白い鉄塔には、男とディンの母親しかいない。
「まだ、息子さんが心配ですか？」
男の問いに対し、ディンの母親は、
「ええ…。とても心配よ。」
と震えた声で返す。男はディンの母親の顔を覗き込み、そっと笑いかけた。
「息子さん、きっと立派に成長して帰ってきますよ。」
天空に浮かぶこの鉄塔の町に、ようやく朝日が昇った。

クエスト2：修練者の島

気付いたらディンはテレポートする前と全く違う場所にいた。ハッと辺りを見回すと、辺り一面緑の平地が。少しばかりかちょっと暑い。

ふとディンは自分の頬をなでた風に何かを感じとった。そして実に驚いたような顔をする。

「…！風が匂う。ここは…地上なんだ。ボク、初めて地上に降りたんだ！」

ディンはここで一つの感動を味わった。

デーヴァ族の治める天空の町、ラクシで生まれた頃から彼はずっと育ってきた。

故に、一度も地上に降りたことがなく、またその姿を一度も見たことがなかったのだ。

ディンは自分の目の前に広がる光景をもう一度じっくり眺めた。時折小さな花を咲かせる明るい緑の平地。自分を見下ろしているかのような険しい山々。そして、大理石の道の先には大きな建物…これはもう神殿としか言えない。

「でも、誰もいないな。ひょっとして、あそこに誰かいるのかな？」

このままいてもしょうがないと思い、ディンは大理石の道を進み、その先にある神殿の扉を叩いた。ノックに合わせて重苦しい音が響き渡る。

「すみません、誰かいませんか？すみません。」

しかし扉の向こうからは何も返事がなかった。

「留守なのかな？それとも、無人か？」

ディンはそっと扉のノブに手をかけた。

ガチャ…

扉には鍵がかかってなかった。
「は、入りま～す…。」
ディンは小声でそういうと、恐る恐る神殿の中へ入った。
神殿には明かりはなかったが、陽射しが神殿の中にも届いていたのでそんなに暗くはなかった。天井は高く、天使の姿をかたどった大きな石像が廊下に並べられている。廊下も大理石だが、赤いじゅうたんが敷かれている。
「なんだか変わったところだなあ。まるで、遺跡をそのまま残したみたいだ。」
というような個人的感想を呟きながら廊下を進むと、その先にまた石造りの扉があった。どうやらこれも鍵がかかってないらしい。どれだけ無用心だか、いやそれ以前に人が使っているかどうか。
「失礼しま～す・・・」
ディンは小声で石造りの扉を開け、こっそり中へ入っていった。
するとディンはふとあるものを見つけ、目を丸くした。
開けた扉の先は小部屋になっていて、結構手入れがしてある。窓はなく、本棚に囲まれている机の上には何冊かの分厚い本が重ねられており、一冊だけ開きっぱなしの本があった。この状態を見て、ディンは誰かがこの神殿を使っていると察した。
ディンは周りに誰もいないのを確認すると、開けっ放しの本をちらっと見た。本には…
「え…ボクの名前？」
開かれた本にはとある人名がびっしりと書かれてあり、名前の横に赤筆でサインがしてあった。ページの最後の行にはディンの名前が書かれていたが、サインはまだされていない。ディンがその本に手を伸ばそうとした時…
「そこにいるのは誰ですか？」
と済んだ声が部屋に響き渡る。ディンはびっくりし、慌てて本を閉じるとガバっと背後を振り返る。そこには青いフードのようなもの

を被っている女性が部屋の入り口に立っていた。
「こんな所で何をしようとしたのですか？」
「え、あ、えっと…。ボクは別に、その…ただの、冒険家見習いとしてここに来たばかりで。」
「冒険家見習い？」
女性は小首を傾げる。
「そ、それで、案内人のユシスさんって人に…。」
「ユシスとは私のことですが？」
「え・・・」
ディンはまじまじと女性を見つめる。
「あ、あなたが案内人のユシスさん？」
「そうです。私に用件があるのでしょう。早く述べて下さい。」
「あ、はい。」
ディンは一度ここで深呼吸をする。
「ボク、ラクシのガイドプロメスさんから紹介されました、ディンと言います！ボク、冒険家になります。だから…ここで…ここで修行をさせて下さい！！」
ディンは思いきり頭を下げ、そのまま硬直した。
一方、女性―ユシスはふぅっと息をつくと、やれやれといった顔で見る。
「顔を上げなさい。貴方がここで修行をするというのは既に把握済みです。」
「へ！？」
ディンは思わず頭を上げる。
「そこの本を覗いたでしょう。それは私がここの案内人として講義をする修練者達の記録なのです。」
「ってことは…」
ユシスは静かに頷いた。修練者の島で修行をする許可がおりたのだ。
ディンの顔がパッと輝いた。
「有り難うございます！そして、宜しくお願いします！ユシスさん

！！」
と大げさに頭をペコペコさせる。
「そうとなりましたら早速講義を始めます。外へ出なさい。」
ディンと案内人ユシスはついさっきディンがテレポートしてたどり着いた場所にやってきた。
「では、ここで冒険家になるための基礎知識を学んでもらいます。」
ユシスは立ち止まると突然そういった。
「は、はい…。」
ディンはもう既に緊張ぎみだ。
「冒険家にとってモンスターと戦うことは日常茶飯事。モンスターに立ち向かう心構えは持っていて当然です。そのために、先ず貴方の実力を試させて下さい。」
ディンはえっといわんばかりの顔でユシスを見た。
「安心しなさい。結果次第で島を追い出すようなことはしませんよ。」
ユシスがそういうと、ディンはすごくホッとするような表情で息をついた。
それからユシスは少し離れたところで飛んでいる鳩のような動物を指差した。
「先ずは、あそこにいるルミナスを狩ってみなさい。」
「え、アレをですか？」
「そうです。」
ディンは少しの間ルミナスを見たが、
「わ、分かりました！」
と取り敢えず大きく頷く。
ルミナスは鳩ぐらいの大きさの鳥型モンスターで普段は大人しい。
冒険家初心者にとって良い相手になるはずなのだが…。
「う～ん…。」

いまいちどうコイツを狩れば良いのか分からないようだ。
「こんなのが、本当にモンスターなのかな…。」
目の前を飛び回るルミナスを見てぽつりと呟く。
「取り敢えず、捕まえて見ようか…。」
ディンはそっとルミナスに近付いた。ルミナスの方は対してビックリもせず平然としている。そして…
「えいっ」
ディンは両手を伸ばし、がばっとルミナスを捕まえようとした。が、あっけなく交わされる。それでもディンはまけじとルミナスを捕まえようとした。が上手くいくはずもなく、ルミナスは平然とディンの猛攻（？）を巧みに避ける。
結局ルミナスはディンのことなどお構い無しに何処かへ飛んでいってしまった。一方のディンは無駄に体力を使い、へなへなと座りこんでいる。
「そんなやり方ではモンスター等まともに狩れませんよ。」
「ゆ、ユシスさん…。」
ユシスはやれやれといった表情で腕を組む。
「手ぶらの状態でモンスターに挑むなど無謀以外の何でもありません。」
「う…」
無論、ディンは地上に降りることすら初めてだからモンスターに会ったことがなければ当然狩ったこともなかった。だからディンは自分の武器というものを持っていない。
「仕方ないですね、少し待ちなさい。」
そういうとユシスは一度神殿に戻った。

少したつとユシスはある物を持って戻ってきた。
「今回は特別にこれを貸しましょう。」
「…これは？」
「モンスターを狩るために使う武器です。」

「こ、棍棒？」
「正しく言うとメイスといいます。このメイスを使ってもう一度ルミナスを狩って見なさい。」
ユシスから受け取ったメイスを持つと、ディンはもう一度ルミナスに近付いた。
離れたところでユシスがじっと見ている。
ディンはメイスを握り、身構えると、音をたててルミナスに振り上げた。
ルミナスはディンに気付いたのか、素早くメイスを避ける。それから飛び回るルミナスを追いかけ、なんとかあのモンスターを当てようとメイスを懸命に振り回す。しかしメイスはなかなかルミナスに命中しない。
「やみくもに振り回しても攻撃は当たりません。決して逃がさないよう敵の動きをよく見なさい！」
ルミナス相手に奮闘するディンに対し、ユシスは大声で助言する。
ディンは一旦攻撃をやめ、自分の狙うルミナスの動きを目で追った。
見るところこのルミナスは平行に滑空し、飛ぶ時の高度を変える際一度その場で小さな翼を羽ばたかせて移動する時よりスピードをゆるめている。
「そうか、分かったぞ！」
ディンはメイスを握り、ルミナスが飛ぶ時の高度を変えるために止まる瞬間を伺った。
ついでにディンはいつでも叩けるようにメイスを上げておく。
その時、ルミナスはディンの様子を見て一度空中で止まり、翼を羽ばたかせた。そして・・・
「はああ！！」
ディンがその瞬間を狙ってルミナスの腹部にメイスを叩き込んだ。
ルミナスが空中でひるむ。
「一度攻撃を命中させたら決して手を抜かずに！連打を浴びせるのです！！」

ユシスの声がとんできた。
ディンは言われた通り、何度も何度もルミナスをメイスで叩いた。
ルミナスはディンから逃れようとしたが抵抗するたびにメイスがヒットする。
遂にルミナスの体力がつきたのか、高い鳴き声を上げて飛ぶ力を失い、地面へ落ちた。
ディンはメイスを握り締め、肩で息をしながら地面へ落下したルミナスを見る。
倒れたルミナスは、もう二度と飛ぶことはなかった…。

動かないルミナスを前に呆然と立ち尽くすディンのところへユシスが歩み寄った。
「どうでしたか？ルミナスを狩ってみて…」
「……」
ディンは何も言わずその場でしゃがみ、ルミナスの羽をそっと撫でる。
「狩るときは、すごく必死だった。それでもボク…こんな小さな鳥の命を、奪ったんだ…。」
ディンが少し震えた声で言う。ディンにとっては、後から思えばとんでもないことだったのだろう。
だがユシスはルミナス一匹に対し、情けなどをかけることはなかった。
「冒険家として危険な地を生きるのに避けられないことです。このようなことでうろたえてたら強い冒険家にはなれませんよ。」
「…はい。」
「素人にしてはなかなかでした。次の講義に進んでも大丈夫そうですね。」
ユシスに促され、ディンはゆっくりと立ち上がった。一度背後を振り返り、動かないルミナスをもう一度眺める。

これが、ディンにとって初めての狩りであり、殺生でもあった。

クエスト3：デーヴァ族の魔法

「ユシスさん、次の講義って何ですか？」
「慌てる必要はありません。」
ユシスはディンの傍をいったりきたりする。
「冒険者として旅立つ前に、知っておくべきことを教えます。何だか分かりますか？」
いきなりそう聞かれ、ディンは少し戸惑った。
何が重要なのかは頭の中でなんとなく浮かび上がるのだが、どうも言葉にならない。
「えっと…なんでしょう。」
「…分かりませんでしたか。」
ユシスはディンに聞こえないようそっと溜息をついた。
「未知の大陸へと旅立ち、危険なモンスターと戦う時、貴方は自分の種族についてよく知っておく必要があります。」
「種族…デーヴァのことですか？」
「その通り。」
ユシスはそう言うと手のひらから何か小さな光の玉を出現させた。
光の玉はユシスの手のひらでフワフワと浮かぶ。ディンがその光景に思わず目を見張った。
「私達デーヴァ族はかつて神聖な光の使徒として地上に遣わした人間。私達は常に光の力を授かり、それを魔力にして利用することが出来るのです。」
そう言い終えるとユシスの手のひらに漂う光の玉は音をたてずに消えた。
「光の魔法…。ボク達がそんなのを。」
「そうです。光の魔法は私達デーヴァ族しか持たない力。覚えておいて下さい。」
「……はい。」

「それでは…貴方にまた一つ課題を与えましょう。」
ディンはいよいよ真剣な顔でユシスを見る。
「マイナーヒーリングという魔法があります。これは、私達デーヴァ族が誰でも使うことの出来る魔法です。その魔法を習得して下さい。」
「はい……え、えええ！？」
ディンは青ざめた表情で平然としているユシスを見上げる。
「そんなこと言われても…ボク、魔法なんか使ったことないし、そんな簡単に出来るものじゃ…。」
「子供でも簡単に唱えることの出来る魔法です。使えなければデーヴァの冒険者の恥ですよ。」
「うぅぅ……」

ここまでキッパリ言われたらもう屁理屈など立てるわけにいかない。ディンは諦めてその場に立つとユシスの言った魔法を言ってみる。
「マイナーヒーリング！」

……

辺りがし～んと静まりかえる。唱えたディンにも、その周りにもこれといった変化はなかった。
「ただ言うだけでは何も起こりません。魔法を唱えるにはそれなりの集中力が必要なのです。」
「……はい。」
子供でも使える魔法を発動することが出来ず、ディンはちょっぴりへこんだ。
「仕方ありません。先ずは魔法を唱える時の体勢を教えましょう。最初に、背筋を真っ直ぐにして立って下さい。」
ディンは言われた通り、背筋を真っ直ぐピンと意識して大理石の壇の上にたつ。

「こうですか？」
「そうですね。そのまま、下半身に重心を置いて下さい。そして上半身の力は抜くように。」
少し分からない部分もあるが、取り敢えずディンは下半身に力を入れた。
「重心が取れたと思ったら更に意識を集中させて下さい。私や周りの物に気を取られてはいけませんよ。後は自由なタイミングで魔法を唱えるだけです。」
「はい！」
ディンは目を閉じ、両手を自分の前に合わせ、意識を徹底的に集中させた。それも、周りの音が聞こえないくらいに…。聞こえるのはディンが頭の中で考える声だけだ。
（魔法を使うのってこんなに集中力が要るんだ…。魔法って、どういうもの何だろ、父さんも最初はこうやって……いやいや、今は魔法を唱えることに集中しなきゃ）
ディンはその場で暫く静止したままの状態だった。その状態が普通よりも長いのでユシスが少し不審に思い、そっと声をかけようとした、その時だった。

「マイナーヒーリング！！」

ディンがいきなり魔法の言葉を叫ぶ。なんとその直後にディンの身体に異変が起こった。
白い光が現れ、ディンの身体を包みこんだのだ。
その瞬間ディンはハッと目を開けて、今のこの光景に思わず目を見張った。
自分を包みこむその光はとても暖かく心地よい。初めて味わう魔法の感覚にディンは思わず表情を緩ませた。が、それもつかの間、魔法の光は何の前触れもなく消えていった。
それに気付いたディンは合わせた両手を解く。

その様子を見ていたユシスがつっ立ったままのディンの所へ歩いてきた。
「初めての魔法、いかがでしたか？」
「……。正直、今でもちょっと進じられません。ボク自身が、魔法を使ったなんて…。」
「ですが貴方の放ったそれは明らかに魔法のものでした。これからはその感覚を忘れないことです。」
「は、はい…。」
ディンが大きく頷くとユシスはやっと安堵の表情を浮かべた。
「それは良かった。これで漸く次のステップに進めそうですね。」
「次のステップ…？」
ここでディンが小首を傾げるが構わずユシスは話を続ける。
「私が教えるのはここまでです。これから先のことは別の教官に教えていただく形になります。」
「え、それじゃ…。」
「次の講義はここでは行いません。身支度をしなさい。貴方はこれから初級教官キャンプに行ってそこにいる教官システィナに会いに行かなければなりません。これが私からの最後の課題です。」
「ユシスさん…。」
デーヴァ族の案内人ユシスの青いフードがそよ風でふわりと揺れる。彼女はそこで留まるディンに苦笑した。
「私のような案内人に別れを惜しむ必要など全くありませんよ。私はこれまでこの神殿から離れていく冒険者を何度見てきたことか。もう、数え切れなくて顔も覚えられないくらいです。」
「……でも、短い間でしたけどユシスさんは…。」
ユシスはゆっくりと首を振った。
「私は、案内人としての役割を果たしたまでですよ。」
「ユシスさん…。」
「最後に貴方に教えましょう。冒険に、人との出会いと別れはつき

もの。避けることの出来ないものです。覚えておきなさい。」
「……。」
「さぁ、今からでしたら日が沈むまでに辿り着けます。行って下さい、ここから東にある初級教官キャンプへ。」
そういうとユシスはディンの背後に回り、その背中を押した。ディンは何も言わず、振り返ることもなく、その足を動かした。

ディンは神殿から東へ歩き始めた。背後の神殿が歩く度にだんだん遠くなる。
修練はまだ始まったばかり。ディンは自分の本来の目的を再度確認して歩き出す…。

クエスト４：夜空

アストライオス神殿から歩いて約４時間。咲き乱れるひまわりに目を向けながら細い道を通るとやがて辺り一面夕焼けに染まる広大な平原が姿を見せた。
神殿の外の光景とは雰囲気が違った。どこまで広がるかわからないほどの平地で、ところどころに道路がある。ディンは地平線がはっきりと見えるその平原にしばらく見入った。が、そんな中ディンはあるものに視線を移す。
「何だろ、家・・・かな？」

ディンが家と見たそれは実に醜いものだった。石造りのそれは既に半壊しており、斜めに傾いている。おまけにあまり手入れをしていないのか、壁にはコケや蔦がへばりついている。
「とても人が住んでいるとは思えない…。」
ディンはそう呟きながらさびたドアを思いきりノックした。叩いても何も起こらないだろうと考えながら。しかし、その考えはあっけなく覆された。
「誰だい、んな乱暴にドア叩くのは」
うっとうしそうな声と共に、さびたドアが音をたてて開いた。その中から、緑のフードをかぶり、口元を黒い布で隠した人物が現れた。声が少し高めであること、そして身体のラインが細くて特徴的であることから女性であるとディンは判断した。
「何だい？私は初級教官だが何か用か？」
「え！？あなたが初級教官のシスティナさん！？」
ディンは内心それなりに驚いた。こんなボロ屋に修練者を鍛える偉大な教官がいるなんて考えていなかったからだ。しかもこんなにも平然と見知らぬ自分の前に現れるとは。
「それが何だ。用もなしにここへ来たのかい？」

「あ、え、えっと・・・。ボク、ここで修行をしますディンと言いまして、それで…。」
「……ああ、ユシスの言ってた奴ってのはアンタのことだったのか。」
「へ？」
ディンは初級教官がポツリと言った一言を聞いて口をポカンとあける。「話は彼女から聞いてるよ。ここで課題を与えてやってほしいということだそうだな。アタシはユシスとは違って課題も厳しいよ。それでも受けるかい？」
ディンは少し重く響くその声を聞き、ごくりとつばを飲んだ。そして…
「やります。お願いします、システィナさん…。」
「わかった。じゃあ、早速始めるよ。」
システィナは外へ出てある場所までディンを連れた。システィナの出す課題はシンプルだがそれなりにハードなものだった。
「ほら、まだ１０周目だ。２０周までまだ先だぞ！」
「は、はい～；」
手始めにキャンプ周辺の平原を２０周走り…。「もうちょっとよく見な。まだいっぱい残ってるぞ。」
「が、頑張ります…。」
システィナの住まう半壊した家の周りの雑草を残らず抜き取り…。
「……。……まだいいとは言ってない！」
「ひいいいぃ…」
その場に座り、暫く動かない。うとうとしだしたらシスティナの棒が容赦なく飛んでくる。
そんなことをしていく内に日はいつの間にか沈み、平原は静かな夜の姿へと変えていった。
ディンは初めて見る地上の夜を外で満喫した。星と月の光でちょっぴり白く照らされる平原に座り、昼間の時よりも冷たく心地のよい

風に吹かれ、ディンは顔を上げ、夜空を見上げた。
地上から見える夜空はラクシでいつも見る夜空とは少し違った。
同じ星と月なのに、地上で見るととても高い。それなのに、天空に浮かぶ町であるラクシで見るよりはっきりと姿形が見えるのだ。
「少しは休憩出来たかい？」
空を見上げるディンの所に初級教官のシスティナがやってきた。
「はい。」
「そうか。」
システィナはそう言うと暫く黙ったままだった。一方ディンはまだ飽きずに夜空を眺めている。先に口を開いたのはシスティナの方だった。
「久々の修練生だったからちとやり過ぎたけど、よく数時間で課題をこなせたな。」
「い、いいえ。そんなボクは…」
「だが、まだ一つだけ必ずするべき課題が残っている。それをクリア出来ればもうここにいる必要はない。」
「そ、そうですか…。」
ディンは漸く顔を前に向けた。
「それは、何だか残念です。」
「何故だい？」
システィナが怪訝そうに尋ねる。
「ボクはここで、初めて違う世界の美しさを知りました。ずっと、ラクシっていう空しかない町に住んでいたから。ラクシにない綺麗な光景をここで見つけることが出来たから。」
「修練者の島は正に他の何処よりも自然体だよ。」
「……。」
「それより、アタシの最後の課題はどうする？望むなら次の明け方にでもしてやっていい。」
「…いえ、今からやらせて下さい。」
ディンはすくっと立ち上がり、システィナを見た。

「…いいのかい？」
システィナが静かにもう一度尋ねる。だがディンはゆっくりと頷いた。
「分かった。じゃあ今すぐ荷物まとめて準備して待ってな。」
システィナはそういうと半壊した石造りの家へ入っていった。

鞄をしょって武器を携えるとシスティナがあるものを持って戻ってきた。
「私の出す最後の課題はこれだ。」
システィナは手にしていたものをディンに見せた。
「…？これは…？？」
「初級修練者の証であるバッジだ。これと全く同じものをここらでうろつくロックトートルに張り付けた。アンタにはロックトートルからこのバッジを取り、ここから東にある修練者キャンプに行ってもらう。」
「修練者キャンプ？」
「そうだ。そこには次の教官、ギルダスっていうのがいる。ソイツに証を見せてみな。」
「…はい。」
ディンが少し戸惑いながら立ち上がって歩き出そうとした時だった。
「ちょっと待ちな。」
システィナが何の前触れもなくディンを呼び止めた。ディンは無言で振り返る。
「一つ、ルールを追加する。」
システィナは一度口ごもったがやがてハッキリとこう言った。
「何があっても絶対にこっちへ引き返したりするな。」
ディンは一瞬目をパチクリさせた。が、
「はい！」
そう大きく答え、再び歩き出した。

夜の地上は美しくもあるが同時に不気味でもある。月と星がなければ本当に真っ暗で何も見えないからだ。
それだけではない。物音も昼間よりはしない。今ここで聞こえるのはディンのしっかりとした足音だけである。
ディンは辺りをキョロキョロさせながら歩いた。いつ近くにモンスターが現れるか分からないから彼なりに警戒線を張ってるのだろう。
（ヤッパリ、朝行って探す方が良かったかな…。）
こんな状況でモンスターを見つけるのは難しい。種類によっては自分の穴蔵に籠ってしまうものだっている。
しかし決断したからには立ち止まり、ましてや戻るわけにもいかない。ディンは手がかりゼロのモンスター探しを再開する。
少し時間が立った時に…

コン……

何か硬いものがディンの足下にぶつかった。石ころか何かと思い、屈んで拾い上げようとしたが…
「…？お、おっきい…」
手のひらで掴めないほどの大きさのものらしい。ディンは触れた左手でその物をそっとなぞった。ゴツゴツしていてところどころに切れ目がある。ところがそれは突然奇妙な現象を起こした。
ディンの触れたそれが唸り声のようなものをあげながら上下に揺れたのだ。ディンは慌てて手を離し、目を凝らして見る。同時に雲に遮られた月の光が地面をうっすらと照らした。すると…
「……！こ、これは…！？」
暗い平原でうっすらと見えたのは呑気に眠りこけっているロックトートルだった。規則的な寝息を立て、岩の甲羅が僅かに上下に動く。
そう、ディンがさっきぶつかったのはこの甲羅だったのだ。
（これがロックトートルかぁ…。すごいな、甲羅が岩で出来てるなんて。）

そう考えつつディンは眠っているロックトートルの甲羅を見回す。
見つけるだけでは駄目だ。システィナの張り付けた初級修練者の証であるバッジがあるかもしれないからだ。しかし…
「このロックトートルじゃないみたい…。」どうやらバッジが見当たらなかったようだ。システィナだって全てのロックトートルにつけたわけではない。
しかしここでお目当てのモンスターを見つけた以上近くに他のロックトートルもいるはずであろう。

原っぱでロックトートルを発見したのを皮切りに、ディンは次々と同種のモンスターを見つけた。その度にディンは甲羅にバッジが貼られてないかを調べたが、なかなか見つからない。
同じ作業を繰り返す中、夜空が少し明るくなった。もうすぐ夜明けなのだろう。ディンはこの時にもロックトートルを一匹見つけた。
このロックトートルもまだスヤスヤと眠っている。
ディンは同じようにバッジが貼られていないか見て回った。そんな中思わずアっと声を上げそうになったがなんとか口を閉じた。
このロックトートルの甲羅ではなく尻尾にバッジが貼られていたのだ。
ディンはロックトートルを起こさないようそっと尻尾に近づき、バッジに軽く触れた。尻尾が上下に軽く揺れる中、ディンは起こさぬようそっとバッジを剥がそうとする。
この時バッジを剥がそうとしたディンの手が止まった。
（もし、ロックトートルが起きてたらどうやって取ればいいんだろう。）
のんびりそうに見えてもし刺激を与えると激しく暴れ出したらどうするべきだったのだろう。やはり倒すしかないのだろうか。
ディンはそう考えると少しぞっとした。その時ディンの脳裏に無我夢中にメイスで叩いた挙げ句その場で息絶えたルミナスが浮かんだからだ。

（そうだよ、今しかないんだ。あんなことをせずにこのバッジを取ることが出来るのは…）
ディンはそう思い直すとロックトートルの尻尾からバッジをそっと剥がした。

そのバッジはシスティナが提示したのと全く同じだ。
（修練者キャンプか…）
ディンは初級修練者の証を握りしめ、次の修練の場である修練者キャンプに向かって歩き出す。
それと同時に地平線から僅かな光が差し込んできた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3276c/

Rappelz～あくなき冒険者たち～

2010年10月15日23時14分発行